

ラ。其のまゝ血刀を掲げて、表へ出て行きます。通りかゝつた「藝妓や、箱丁やは、之を見て、人殺しや……」と云ふ此の聲にお茶屋は、表をば一ツ時に皆閉めます。夜鳴きのうどんやは、荷もひつくり返すやら、箱丁は三味線箱を打ち捨て置いて逃げるやら、往來の人等は、四方八方に逃げまどふ、總三郎は、むやみに、あばれ廻つて、お茶屋の行燈は、片端しから切落し、遂に祇園の石段の所を曲りますと、下河原に出ます。祇園の南門の鳥居際には、むかひあいにお茶屋がござります。これは祇園とうふの二軒茶屋と申しまして、この東側は中村屋、庭さきでは澤山な切籠燈籠を吊り、山猫の藝妓が、百人ばかりも秋草の模様の着いた揃への着物に黒緋子の帯を立こに結び、銀の團扇を腰に差して、あたまは、いづれも島田に結うて、すゝきのカンザシを差し、華美しきいでたちで、總踊りをいたして居ります。處へ總三郎は、血刀掲げて、フラ〜と参りました(囃子唄「伊勢のやうだの」一ト踊り二見の浦に住みなれてヨイ〜ヨイ〜ヨイヤサ)總三郎は舞妓の肩先より一太刀ザクリ舞妓はそれへ倒れました「なにしとおゐるね、こんなところへ、ねんね、したら、いかんえ」(唄)「ながいもあればみじかいも、あるわお武家の腰のもの、ヨイ〜ヨイ〜ヨイヤサ」またもや斬り付けました「アレエ」(唄)「梶原源太景季は、ほうらく頭巾に長羽織、ヨイ〜ヨイ〜ヨイヤサ」「人殺し」總三郎は片つばしから、斬り付けました、何かはもつて、たまりませう、見る〜内に傷を受けた者は四五十人、即死した者は數知れず「イヤ人殺しや——」と云ふので、上を下への大騒ぎ、御上様も近ふ御座りますから、早速此由を届けましたので、お捕方役人衆が向ひました「御上意々々」と皆各手に十手を振り上げて、立向ひましたが、誰一人捕り押へる者がござりませぬ、名にしあふ村

正と云ふ妖刀でござりますから、さわるや、さわらんに、傷を受けますので、誰しも命は惜しいから唯ワイ〜〜〜云ふて居りますばかり、處が總三郎の實兄總兵衛は、木屋町の宅に用向きがあつて来てみますと、總三郎も番頭の忠八も居りませぬから、これは全く富永町のお時の許へでも行たのやらうと、思ひまして、お時の宅へ来て見ますと、お時を始め番頭下女、三人とも殺されて居ますから總兵衛は大いに驚きました、近所は一軒も門戸の開いてる所は御座りませぬから、尋ねようにも致し方なく、ブラリ〜と何處へ行くともなく、祇園の南門……、こゝは妙なもので、兄弟の縁に引かされましてか、思はず中村屋の庭さきへ出て参りました、すると大勢の役人が取かこんで居ります中央に、弟の總三郎が、血刀を持つて、仁王立ちになつて居ります「イヤー其方は總三郎ではないか、チエー情ない事をして呉れたなア」コリヤ〜、其方は何者ぢやア「へい私は身寄の者で御座ります、何とぞ、あれなる亂心者をば、私に、召捕せて下されようなら有難い仕合せでござります」イヤ、苦しい事だ、早く行つて召捕れ「自分が行つたら斬られるから、行く方が餘程苦しい、恰度願ふてもない事だと云ふので」サア早く行つて召捕れ許す……」總兵衛はツカ〜と行つて總三郎の後からグツトでない此の村正、斯様な物を所持するから、多くの人を殺害なし、京洛中を騒がした、不埒者奴「エ、チヨコザイナ事云ふな、エ、放せ、放さねば斬るぞ」總兵衛にむやみに斬り付けます、すると傍に見て居た役人衆「何れも御同役、只今彼れなる者の言葉をお聞きなされたか、町人風情の、持つべき刀劍ではない、村正と云ふ銘作ぢやと申すが、如何にも不思議な刀の斬れ味、斬られし者も許多あ